

## 音韻イメージからさぐる「度量衡」概念の推移

2006年 2月 岡林みどり (2011年 補足)

### 目次

- 1、質量、重さ、重力、重量・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p 1
- 2、現代日本語における度量衡関連の形容詞の差異について・・・・・・・・ p 2
- 3、「モノ」の語源と「大きい」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p 4
- 4、「コト」の語源と音韻イメージによる造語法・・・・・・・・・・・・・・・・ p 9
- 5、数え方の謎と音韻「ヨ」のイメージ、そして「ついたち」の語源・・・・ p12
- 6、「質」概念と「八はつ」の導入・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p17
- 7、最後に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p19

### 1、質量、重さ、重力、重量

2000年、大手電気会社のビデオカメラの製品スペックに「撮影時質量\* k g」という表示があるのを見て、とうとう来るべきものが来たと思った。普通の日本語話者ならば「知りたいのは持った時の重さであって、物理学の概念量ではないよ」と思うはずだ。だが大手電気会社の人たちは日本語話者のプリミティブな直感よりも、JIS や計量法を使ってまで自分たちの自己満足を追及しようとする一部の理科教育関係者の意向にしか関心がなかった。

JIS や計量法がどのような定義をしようとも、それは専門家の間の約束事であって、その用語をそのまま日常生活に持ち込まなくてはいけない、などと明記した法律はない。日本では法律教育の最初に「明文法」と「実体法」の違いをきちんと教えないので、法律とは条文だと思い込んでいる人たちが多いが「明文法」の上位に「実体法」がある。

実体法とはようするに「常識」のことである。キリスト教国ならば「モーゼの十戒」がすぐ浮かぶが、どこの国の法律にも「殺してはいけない」などとは書いていない。殺した場合の刑罰についての条文があるのである。当然人々が理解できない条文などは意味がないから法律の専門家の役割は日常語で人々に条文を説明することになる。

ところが今回おきたことはまず法律の用語を専門家の都合にあわせて変えておいて、それを人々の生活に法律の名で強要するということであつた。もちろんプリミティブな直感を大切にする企業もある。今回の件で言えば「通販生活」は「重さ \* k g」表示で通している。さらに詳しい説明は2000年に書いたものがあるのでそれを参照してほしい。

「一貫性の科学／確実性の技術」

<http://homepage2.nifty.com/midoka/papers/consist.pdf>

その後、私もこの件については是正がなされるだろうと楽観していたのだが事態はむしろ深刻化していった。「自動車重量税」は「自動車税」に変わり、それ以前からエレベーターの中の「積載重量」は「積載」に変わっていたから、日本の公的場面では「重」の字にお目にかかれない事態となっていた。しかし、今更悪態つく気にもなれなかった。

だが、気持ちが変わったのは 2004 年の OECD による世界規模の学力調査で日本の子供たちが天秤を使った簡単な問題で他の国よりも有意に得点が低かった結果を知ったときである。天秤の上に細長い板を置いて重さをはかる時に、板の置き方で重さが変わるかどうか、という問題で正答率が低かったのである。2000 年までこの問題についていろいろな方と話をしている理科教育の一部で「重さは地球と月で変わる、つまり徒な数字。質量こそが宇宙の果てでも、いつまでも変わらない真の値」という啓蒙注入が行われていることを知らなかったら、短い新聞記事にピンと来ることはなかったと思うが、私には問題の核心がすぐに理解できた。

2004 年末に久しぶりに、この問題について考えだすきっかけを与えてくれた理科教育メーリングリスト(当初、横浜国大にサーバーが置かれていた)で書き込みをはじめたが、決定的な論点を作り出すのはとても難しかった。「コレは質量なのか、それとも重さなのか」と考えていると古代に「馬なのか鹿なのか」といって憤死した人のことまでがしのぼれて来て私もこのまま狂い死ぬかもしれないと思ったことも何回かあった。がんばれたのは「プリミティブな直感」がなければ人類は立ちゆかなくなる、という確信だった。

方向が変わったのは web の辞書で、度量衡の説明に「長さ、容量、質量」とあるのを見てからであった。出版社にメールをすると担当者から「最先端の科学技術の成果を取り入れて辞書の改編を行うのは責務です」という返事が来たのである。それまで専門用語を駆使して論点を炙り出そうとしていたわけだが、今度は理数系の知識を持たない人を説得しなければならないことになった。

結果をかいつまんで言えば「質量」の英語は mass。これは物理学以外では「大量」「大きい」と訳す。そして日本語でも重さと大きさはまったく対応するのである。

- ・ 5kg のザックと 3kg のバックでは前者が重い。
- ・ 5 万トン客船と 3 万トン客船では前者が大きい
- ・ 太陽と地球では前者が大きい

ニュートンが運動力学を確立するときに「weight 重さ」の代わりに「mass」という用語を使って以来物理学では weight の代わりに mass を使うのだが、人間の身体感覚によらない量は「重さ」よりは「大きさ」を使うのが理なのである。さらに 3kg、5kg といった量なら実際に秤を使って測るが、5 万トンという値は天秤で求めた値ではなく、個々のパーツの重さを合計した「数値」に過ぎない。だから「大きさ」なのである。日本語でも数字については大小で表現する。ニュートンの力学との関連まで入れた詳細は以下をご覧ください。

「大辞林の「重さ」と「質量」について」

<http://homepage2.nifty.com/midoka/papers/daijirin2.pdf>

## 2、現代日本語における度量衡関連の形容詞の差異について

## 音韻と度量衡

次に考えたのは、現代日本語で「大きい、重い、多い」の機能の差異である。この3つに「長い、広い、でかい」を加えた6つの形容詞は現実にどのような感覚で運用されているのだろうか。そこから日本語話者の「量概念」を探ってみた。文例はすべて、直示文である。対照のため「雄雄しい」も入れた。

### 例1

- ×あれは長い。(計らなければ わかんないぞ)
- ×あれは大きい。(見ればわかることをいちいちツベコベいうな)
- あれはデカイ。(そんな風に見えたのね)
- ×あれは重い。(触りもしないでわかるもんか。重そう、と言え。)
- ×あそこは広い。(計らなければ わかんないぞ)
- ×あれは多い。(あっちのほうが多い、というのが本来だろう)
- ×あの方は雄雄しい。(○あの方は雄雄しい方です。)

### 例2

- あれは長いのです。(以前に測ったことがあるんだな)
- ×あれは大きいのです。(見ればわかることをいちいちツベコベいうな)
- ×あれはデカイのです。(見ればわかることをいちいちツベコベいうな)
- あれは重いのです。(以前に持ったことがあるんだな)
- あそこは広いのです。(以前に見たことがあるんだな)
- ×あれは多いのです。(あっちの方が多いのです、と行って欲しいネ)
- あの方は雄雄しいのです。(個人的な思い出があるんだな)

### 例3

- あれは長いんです。
- あれは大きいんです。
- あれはデカイんです。
- あれは重いんです。
- あそこは広いんです。
- ×あれは多いんです。(意味不明！)
- ×あれは雄雄しいんです。

### 例4

- これは長い。(そういう風を感じたのね)
- これは大きい。(そういう風を感じたのね)
- これはデカイ。(そういう風を感じたのね)
- これは重い。(そういう風を感じたのね)
- ここは広い。(そういう風を感じたのね)
- ×これは多い。(こっちのほうが多い、というのが本来だろう)
- ×これは雄雄しい。

例 5

- これは長すぎる。
- これはデカイすぎる。
- これは大きすぎる。
- これは重すぎる。
- ここは広すぎる。
- これは多すぎる。
- ×これは雄雄しすぎる。

例 6

- これは随分と長いこと。
- ×これは随分とデカイこと。(気取った時はデカイなんて言わないよ)
- これは随分と大きいこと。
- これは随分と重いこと。
- ここは随分と広いこと。
- これは随分と多いこと。
- これは随分と雄雄しいこと。

以上から言えるのは「デカイ」は視覚印象を記述するが文書語では使えない。「重い」は触覚印象語あるいはベルグソンのいう筋肉努力印象語であり、かつ文章語としても使える。「長い」「広い」は「多い」「大きい」よりは印象語として使えるが、相手は計測経験からの意見と受け取る可能性が高い。「多い」は直接に比較対照物が明示されない文脈では違和感がある。「大きい」は直接見えるものについての陳述は「言わなくてもいいのに」という印象を与える一方、「デカイ」が使えない文脈で比較対照が明示されない文脈でも使う。

心理印象形容詞「雄雄しい」をコントロールに入れることで明確になったのは、「～すぎる」が「文綾」は別として「雄雄しい」には使いにくいのに対し、度量衡系形容詞系はむしろ「～すぎる」を使った方が文が落ち着くということである。

要するに簡単に「度量衡＝長さ、容積、重さ」とは言えない、ことがわかった。実際に単語が使われる文によって聞き手は「印象語」なのか「計測語」なのかを判断しているということである。そして計測量については全体として「大きい」表現が広まっているといえる。たとえば「広い部屋」は「大きい部屋」と言うこともできるが、これは話し手の中に「六畳」とか「八畳」とかのイメージがあるので、「大小」の軸が働くのであろう。

### 3、「モノ」の語源と「大きい」

この問題は「重さ weight」から「重力 gravity」が分立したこともひとつの要因なので次に「力」あるいは「強さ」と「大きさ」の問題が日本語でどのように扱われてきたのか

考えてみた。

以前から「重さ」はなぜ「オモサ」なのか「重」の字は「オモイ」とも「カサネ」とも読むのはなぜか、などが気になっていた。語源的な領域の問題ではないかと思って、「タミール語」「朝鮮語」「モンゴル語」「アイヌ語」などと日本語を関連付ける本を手にとってきていたが、今一私の関心とは重ならなかった。

最後にというより、早くから「きっといいことが書いてあるだろう」と本棚に加えておいた津田元一郎氏の「日本語はどこから来たか」が大きなヒントになって「大きい」「重い」の問題がするすると解けた。それまでも思想的な問題を日本語で考え出すと「モノとコト」「ミチとスジ」が極めて重要なキーワードであり、この4つを解明しない限り日本の思想史は本物になり得ないと考えていたのだが、氏は「モノ」の語源は「マナ」にさかのぼれるはずだと書いていた。

氏の専門性に裏付けられた「モノ」の音義解釈にはほとんどピンと来るものがなかったがマナがメソポタミアから小アジアにかけて信じられているのは、それが特殊な樹液を蒸散結晶化した「甘い」物質であること。メラネシアでは「マナ」は霊力が宿る不思議な物質、それを所有する人が霊力のある人とされていると書かれているのを見てピンと来たのである。その「マナ」は「結晶塩」に違いあるまい。これを仮説1とする。

世界で金・銀よりも前に交換の基軸物質になったのが「塩」。その中で精製度が高く透明な結晶が得られれば、あるいは塩交換システムの基準物ならば、それは崇拜の対象になっても不思議ではない。現在で言うならばパリのどこかの建物に眠っている「質量原器」のようなもので、そのコピーを持っていることだけでなんか「日本も大国なんだよな」という気に人々をさせることができる物、それがマナだったのではないだろうか。当然、その時期に、交換制度の基盤技術である度量衡のシステムも伴って文化は伝播したはずである。

近世の日本語では「マナ」は「真肴」と呼ばれ「食用の魚」をさすと辞書にある。だが冷蔵庫のない時代には食用の魚は原則、特に宮廷のようなところでは塩漬けて干した魚であったのだから「マナ」が「塩」と関連すると考えてもぶっ飛びすぎとはいえないと思う。トマトやスイカに塩をかければ一段と甘みが増すのも周知の事実である。

一方、砂漠の民に伝わった「マナ」が海水ではなく「樹液を煮詰めた」乳香のようなものとして伝承されたのも、それはそれで納得がいく。

ここまでくれば「マナ」と「アマ」の関連も明白だ。かねがね日本史では「海」と「天」の両方を「アマ」と読ませるのは何故かと思ってきたが、「高天原系」以前の人々は「海」を指していたのに対し「高天原系」の人々は「天」と改め、さらに「海アマ天」よりも高いところから来た、と自らの歴史を飾ったのであろう。「海と塩系」から「高天原＝山、そして金属系」へと支配者が変わったのだ。

字を読めない人々を対象にした教化方法は新しいオンの後に従来のオンを加えて、意味を示す方法が合理的なので「アマ」の前に「タカ」を加えて新しい価値軸を明示したのだ。正史編纂の時に「アマ」を漢字「天」とすることで正史としての文意を一貫させたのであ

ろう。どのみち日常生活では「海」は「ウミ」、「天」は「ソラ」で「海アマ天」は口承正史の中だけの概念だったからそれでよかったのである。

津田氏は続いて現在でも「マナの儀式」と称して子供の勉強始めの儀式、つまり「マナぶ儀式」を行っているユダヤ教の例を引き、近世まで子供の「お喰い始め」を「マナの祝い」としてきた日本の事例を紹介していた。それで駄目もとで「マナ」「アマ」「アラー」をオ行音に一括変換した「モノ」「オモ」「オロ」で表を作ってみた。それが以下である。

表1；真肴と藻塩

塩 交易 理念	<b>最高の物</b>	<b>あまねく</b>	<b>始原</b>
	マナ mana	アマ amen	アラーallah
	結晶塩・藻塩もしお	海・自然	荒らぶる神
計 測 労働	モノ mono	オモ	オロ
	升/mass	オモ重	オロ大
	有用物	存在物	オロチ大蛇

古 事 記	<b>最高の物</b>	<b>高天原</b>	<b>征服者</b>
	マナ・モノ	アマ・オモ	アラ・オロ
	まなこ目	おもて面手	おおきみ大君
	マナ真名	主おもだつ	雄雄しい
仏 教 説 布	<b>最高の物</b>	<b>よも四方</b>	<b>よろずの神</b>
	まな	あま	あら、まあ
	真肴；宮廷用の干し魚	あまい・うまい	仏陀
	なま魚	尼・海人	オロ愚か者
	もののふ	おもしろい	おろおろ
	ものものしい	おもおもしろい	荒い・粗い
近 世	<b>物</b>	<b>思う者</b>	<b>おおやけ</b>
	大きい・多い・重い	おもな主あるじ	表す・現人神
	ものすごい・ますます	大切・大事	おおごと大事
	計はかる測	図はかる謀	計はかる諮

なんと「モノ」「オモ」「オロ」は古事記の重要な概念と対応しているのではないか、この時代すでに存在が重力を必須としているという認識があったとしても不思議ではない。このことを早くから意識化していればこそ江戸時代の幽霊はハムレットの父親の幽霊とは違って足がなくなっていくのである。

古事記の時代になって「高」が導入されて「オロ」は被征服者の「強さ」の形容専用語となり征服者の美称には漢字「大」を介して「オオ」が用いられるようになっていた。

それは江戸時代の「おおやけ」という概念にまでつながっていく。一方で、「オモ」は語形を変えることなくもっぱら個人に付随する概念として「思う」「面」「主な・あるじ」となり「おおやけ」の対語である「私」の活動に関する重要な概念となっていた。

だからこそ 2 節で見たように、「重い」「は「デカイ」「広い」と並んで客観的な数量とは別にあくまで「個人の実感」として語られることが日本語文法で認められるのである。

結局、近世にいたり、「大きい」「多い」「重い」は「物」の形容詞となるが「おお大」はあらゆるところに出没する。それだけ美称としての神通力があったということであろう。それは現在でも変わらない。さらに「オオ」には現在でも「荒ぶる神」を連想させる使い方もある。

例えば、私の子供のころは「大地震」は「ダイジシン」だったが、近年人々の関心が高まるにつれ「オオジシン」となっている。これは「オオ」の方が「おお、こわい」という感じがするから人々が好んで使うようになっているのだと思われる。要するに現在でも日本語話者は自分が「オロオロする」時にはその原因を「オオ」と表現する。あるいは「大部屋」とは「下積みの人の部屋」であるから「大」は善と悪の両義性を現在でも保っている。

まとめると「マナーモノ」の「モノ」は近世には「物」だけを指すようになり、代わって「アマーオモ」の「オモ」はむしろ「思う」となって「者」を指すようになった。「アラオロ」の「オロ」は「オオ」という美称を獲得して第一義的には「おおやけ」を指し示しながら「物と者」の形容詞としても広く使われるようになった。

さらに今回の発端となった **mass** と同音の「升」がここで登場している。これらの用語とともに「升」も日本語になったと見るのが素直な見方だと思う。英語の **mass** も専門用語でなければ **massive** のように「圧倒されるような物の量」という意味をもっているからかなり近い意味関係にある。しかし、ここで重要なことは今日の意味での度量衡は日本では受容されなかった。あるいは官吏教育のカリキュラムにはなかったとしても、民衆教化の必要はないとされてきたことである。

国語辞典をみると現在の計量法と度量衡との違いがはっきりせずになんとなく連続している印象をもつが、はっきり違っている。なにより「衡」は歴史的には「金属の量」を計測して貨幣を国家権力の基盤とすることを目標にしてき。現在のように生鮮食品まで **kg** 単位で計るなど考えられなかった。その必要がなかったし生鮮食品の量など一晩で重さが変わってしまう「物の量」を高価な天秤と錘をつかって計る必要はなかったからである。

もちろん近世に入ってから「物の量」は升の数量ではなく「重さ」によった方が厳密に求められることを人々は知っていたが、「おおやけ」にするにはあまりに長く見た目や升の数量で物の量を測ってきたので「重さ」を公式には使うようにはならなかった。だからお米の販売単位が **kg** に移行してずいぶん月日がたつのに炊飯器の単位は **ml** ではなく「合」を使っている。このような領域では人々は保守的なのである。

ただし徳川幕府は「石高」や特殊な字の「嵩」を使うことで納税システムの基盤が「重

さ」にあることを人々に強く暗示していた。秤が普及して人々の日常生活で用いられるようになる」と感覚的に求めた印象量である「重さ」と区別するために「目方；天秤の目盛りによる方法」という言葉をつかって計測された重さ量を印象量から区別するようになった。

現在の国際度量衡会議は目方の基準を質量原器と呼び、長さの基準を光速と原子の振動数に求めている。そしてすべての計測値は、数量になった。だから日本語では基本的に「大小」で表現することができるようになった。人々の語用法も例えば、「部屋の広さ」から「部屋の大きさ」に変わった。だからといって「天井が高い部屋」が増えたわけではない。数量表示がすすめば、そして手秤・目秤などの「見繕い」活動が萎えていけばすべては数量の大小に収斂していくのは当然なのだ。以上を簡単に「表2；度量衡の変遷」としてまとめておいた。

表2；度量衡の変遷

	度	量	衡
近世まで	二点間距離	物の量	金属の量
	ひろ尺	ます升・かさね重	おもり錘
	長い・広い・大きい	多い	重い
	あいだ間ケン	嵩高・石高	目方
現代	measures	数量(大小)	weight/mass
	原子振動		質量原器

なお、つけくわえるなら、日本の歴史上「重い」はあくまで個人的な感覚を表明する語であって、公的な、つまりおおよげの場面ではむしろ避けられてきた語であることを確認しておきたい。

だから、戦後の町々にあふれるようになった「積載重量」や「自動車重量税」に目をむいた老人がいたとしても不思議はない。「メートル法」の実施だけでも愛国心を傷つけられた人々が「重」の字排斥運動に無意識のうちに参与していったのも無理ないと思える。

それと呼応したのが「質量教」と化した一部の理科教育関係者であろう。その運動が実を結んだのが2000年。子供たちが「重さ」の問題を素直に読めなくなったことがはっきりしたのが2004年。私は当初ベクトル概念に対する無理解のなせる業だと考えていたが、もう少し歴史的・文化的背景を持っているようだ。

むしろ国語教育と一体となった理科教育の改革が必要だとの結論にいたった。

2011年5月補足； 衡とマナ

ここでは「衡」を金属量と関連づけているが、前の方の議論では「マナ」を日本の場合は「干し魚」、メソポタミアでは「特殊な樹液を蒸散結晶化した甘い物質」に関連づけてきているので、共に乾燥重量だと考えられる。だとすると四字漢字熟語では「恒常数量」と認識しておくべきである。なお、『塩鉄論；山田勝美』によれば前漢には〈酒・塩・鉄〉の組語が国家による専売制度に関連して流通していたようである。

#### 4、「コト」の語源と音韻イメージによる造語法

3節で「モノ」の語源が明らかになったのであるが、それでは対語である「コト」の語源はどこにあるのだろうか。表1のような「ア→オ」という造語法であるならば「コト」の語源は「カタ」となる。これは「タカ」の逆接語である。

なぜなのか。いろいろ考えていくと「マナーアマ」はその後いろいろな語につながって日本語の中で生き延びてきていることがわかるが「アラーオロ」は美称の「オオ」はともかく、きわめてマイナーな「おろおろする」とか「おろか」としてしか生き残ることができなかった。「カタ」はその「オロ」の代替物と考えることができるのではないかと着想した。これを仮説2とする

そうであれば「まな・あま・かた」としてシステムを継承しつつ、あらたに「タカ」を加えることで、そのシステムを超越したことになる。事実「カタ」は人間の「肩」だけでなく方向の「方」や「かたち」「かたまり」など日本語の語彙体系の中心に現在でもある。

以上のようなことを整理したのが表3である。

表3；造語法の推移

漢字の逆接による対語			ア音とオ音の対語			？
科学技術立国	武士道	古事記	識字層の不在；音韻イメージ			修験道
未来	天為	高天原	たか			天道
			まな・あま・かた			
理論	道筋・みちすじ	事物・もの	もの			人の道
論理	筋道・すじみち	物事・こと		おも		
					こと	
宇宙	人為	常世	とこ			道理

識字層が不在の社会で抽象概念をとりだし社会的に共有するには「音韻イメージ」の連想作用が大事だったのは当然だ。その後の漢字の導入で、このような「音韻イメージ法」は「漢字の逆接法」へと大きく変わっていくが、それ以前に日本語話者の抽象的世界は以下のように完成していたと見ることができる。

- ①物一重さ一事
- ②者一思い一言

すなわち「タカ」と「トコ」の間にあるこの「世の中」には2つの存在がある。「者」と「物」である。それぞれが異なる「コト」をもつ。すなわち「言と事」である。「モノ」と「コト」をつなぐのがそれぞれ「思」と「重」である。

よく考えるとこれは二重の三元システムという歴史的にも画期的な世界の認識方法な

のである。現在の私たちにはこのシステムが「マナーアマーオロ」系から直接導かれたものなのか、日本語話者の祖先たちの卓見によるものであるのかはわからない。

ただし上記の対語は英語でも簡単につくれる。

例文 7

① Loads sink to state on the road.

② Lords think to state on the road.

ここで重要なことは、その後の歴史では、このシステムの全貌を直裁に伝えては来なかったことである。それは公式の二元論と世俗の三元システムに分かれて伝えられてきている。それを表 4 にまとめてみた。

現在に至るまで日本人の心性に大きな足跡を残している武士道を中心に三つの表を見てみよう。古事記の「モノとコト」との違いは、こちらの二字熟語は「ミチとスジ」にわけて使われることは少ないということである。「筋道」と「道筋」でなければ意味を取りにくいのである。それはなぜだろう。それは古事記の世界が事象の世界であるのに対し武士道は現象の世界を表現しているからだ。

ここで重要になるのが「ザビエルの渡来」である。学校の歴史ではザビエルについて学ぶ。だが異文化体験で最も重要なものはそれを受け入れた人々の主体的な努力の方である。徳川の体制はキリスト教の研究なしに闇雲に鎖国を実施したのだろうか。

最新の関考和研究は彼がある時期、幕府の「転びバテレン収容所」に日参していたことを明らかにしている。当時の体制派知識人はキリスト教を熱心に研究しそれを上回る理論武装を成し遂げていた、と見るほうが自然であろう。では体制派知識人は何を実現したのであろう。

その時彼らは「マナーアマーアラ」は実は「塩と海」という「物と空間」の世界に限定されるべきではなく「潮とその干満」という現象世界の意味をも持っていたことを発見したに違いない。つまりは「現象と時間」を再発見したのだ。その成果が武士道である、と見るべきであろう。これを仮説 3 とする。

ここでザビエルの痕跡を他の所に求めるなら第一は禅宗の「不立文字」となる。モーゼの十戒の最初の三戒を読み下せば以下のようになる。「神は敬わなければならないが、神はその象りでもなくその名でもない」。

表 4 ; 日本における二元記述システムの推移

権威	象徴句
古事記	モノとコト
華嚴	一切即全
真言	色即是空
幽玄	白砂青松
ザビエル来日	
禅宗	不立文字
朱子学	天為と人為
武士道	道筋と筋道
芭蕉	不易流行
文明開化	理論・論理

キリスト教における聖霊もその特徴の第一を「見えない」とされる。「だけど、どこにも聖霊はいる。私たちは風を見ることはできない。だけど風はふく。私たちは知る。」となる。これを漢字熟語で表せば「不立文字」以外にはありえない。

では三元記述システムとは何であろう。表5に概略を示してみた。現在もそうであるが江戸時代の日本語話者も「三題噺」が好きだったようだ。だから私の認識としては世俗の人が三元システムで暮らし、権威は二元システムで記述する、という風に考えていた。

だがあるイギリスのキリスト教神学者が二元論は庶民に理解しやすいという意味で大切にしないではいけな  
いが神学を究めれば三元システムになじむことができる、と語っていたので逆かもしれない。

あるいは大昔は物の量は容積の数量でしか計測できないまま長い時間がたち、近世に入り実際には衡量を使うようになったのに「公」の表記は嵩で行っていたように、西洋でも近世の庶民は江戸庶民同様、しっかり三元系で生きていたのかもしれない。私にはここまでしかいえない。だが江戸の町民が三題噺を楽しむ知的能力があったと考えてもいいとは思ふ。

ここで面白いのは「修験道」である。私には知識のない世界なのでよくわからない部分もあるが彼らは「天・人・道・理」を要素としていたように思われる。だが現在に至るまで残っている言葉は3つ。しかしその影響は半端ではない。その3つは「どうりで」「おてんとう様」「人の道を踏み外してはいけない」である。今日の日本語話者の根底にある世界観ではないだろうか。

幕府は鎖国をするとともに地動説は受け入れないことを決めたに違いない。そして現在の糸井重里のような天才コピーライターに「天・人・道・理」を噛み砕くことをさせたのであろう。だが浸透したのは三元系としてであった。

表5；世界における三元記述システム

時代	象徴句		
塩と潮の道			
陰陽五行	赤・青・黄		
古道	アマ・オモ	モノ	コト
十戒	神	偶像	神の名
中世神学	聖霊	子キリスト	父
ザ ビ エ ル 来 日			
世阿弥・ばさら	はな	見	離見の見
修験道	どうりで	おてんとう様	人の道
武士道	おのれ一身	道	筋
おおやけ	鷹・反重力	嵩・石高	お上
三題噺	たか	ふじ	なすび
開 国 ・ 文 明 開 化			
チューリップ	あか・しろ・きいろ		
物理学	実在	空間	時間
生命科学	実存	構造	機能

また、徳川政権が「鷹」をシンボル化したことはよく知られている。だがその意味についてはあまり語られない。そこでいくつかの推論を行うと、度量衡からみれば彼らはすでに「衡量」こそが租税の基盤技術であることを認識していた。そして時期から言ってもガリレオがアルキメデス以来の「比重 gravity」を「重力 gravity」と定義しなおしていることも知ったに違いない。

だとすれば鎖国の大儀である自立自尊のメタファを「反重力」と置くことで「高天原」の再定義をしたと考えた方が自然である。そしてその反重力の鷹を撃ち取り支配する征夷大將軍こそが「鷹狩」のメタファであろう。

当然西欧においては「大きな鷲」が領主のシンボルであることも知っていたに違いない。だからこそ征夷大將軍は「小さいくても強い鷹」を好み、庶民には「小さくてもピリリと辛い山椒」を奨励し、江戸間は京間より小さくて良し、とたのであろう。つまりは何のことはない「内包量」重視こそが徳川企業体の「社是」となっていたのである。学校ではこれを「質素儉約の督励」と習ったが、庶民に「反重力」の概念など理解してもらっては困るのだから民衆教化の題目としてはきわめて当然である。すなわち、徳川政権は「内包量」あるいは「ベクトル概念」を自家ロウ中のものとしていた。これを仮説4とする。

そんなことはつゆ知らず、「おてんとうさま」がぐるぐる回る世に生きる庶民にとっては「鷹」よりは「富士；米を升ではかってムシロにためていったときの姿」の方が嬉しかったのもこれまた当然である。

### 5、数え方の謎と音韻「ヨ」のイメージ、そして「ついたち」の語源

最後に、問題にしたのは、数字の大小の日本語における意味である。かねがね気になっていたのだが、日本語では日にちの数え方はかなり古い表現に漢風の表現が虫食い状態で入り込んでいる。では今に至るまで残っているオトはなぜ残り続け、それ以外のオトはどうして漢風を負けてしまったのだろうか。現代日本語の語彙のうち、古来より残っているオトはどれで、どのくらいあるのだろうか。ざっと数え方の復習を表に示す。

表6：数え方の謎

漢風	数	いち	に	さん	し	ご 指の数	ろく	しち	はち	きゅう	じゅう		
	月の名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	くがつ	十月		
	物 数える	一個	二個	三個	よんこ	五個	六個	ななこ	八個	九個	十個		
	ひと 数える	ひとり	ふたり	三人 みな	よにん	五人	六人	ななにん	八人	九人 くにん	十人	百人	一万人
古来	数	ひい	ふう	みい	よ	いつ	むつ	なな	やつ	ここ	とお	もも	よろず

							仏教の素数				
物 数える	ひとつ	ふたつ	みっつ	よっつ	いつつ	むっつ	ななつ	やっつ	ここのつ	とお	
日つけ	ついたち	ふつか	みっか	よっか	いつか	むいか	なのか	ようか	このか	とおか	

まず「よん」と「なな」であるが、これは「日にち」だけでなく、本来「漢風」であるべき個物の数え方にまでむしろ侵食している感じである。「なな」は広辞苑によれば「四十九日；なななぬか」のように仏教用語に残っていたようであるから「仏教の素数」として民衆に広まっていったと考えていいと思う。一方「よん」については「シは death の意味を連想するのでヨンを使います」などと私自身も外国人に説明してきたが、本当だろうか。

気になるのは「ようか」である。「やうか」の母音交代とか説明されているようだが、本当だろうか。「ようか」だけならば、その説明でもいいと思うが、では「ヨロズ」はなぜ「ヨ」なのだろうか。「ヨウカ」は「ヨヨカ」のスラーリングではないのか。意味的には  $8 = 4 + 4$ 、であるから、「ヤ=ヨヨ」でもおかしくない。

ここで考えるべきは日本語における「ヨ」の意味的多義性と重要性である。「漢字訓のヨ」には「世・代・夜」の三つがある。そして興味深いことに「夜」の漢風音は「ヤ」。一方「八」の漢風音は「ハチ」で訓音が「ヤ」。

忘れてならないのは、日本人にとって事実上「世の中」や「世間」がなによりも大事なことだ。抽象事ならば「世界」だが、具象の世界ではなんといっても「世の中」が一番大切なのである。だから、日本人にとって長い年月「ヨ」は「世界」を意味していた。これを仮説5とする。その上で表7を見てほしい。

表7；概念の拡大

四音	現存音	ひい	ふう	みい	よお				
	月と潮	潮干ツ	月太ツ	潮満ツ	月経ツ				
	人間観	私ヒ	あなたフ	みな	夜・世		世・世	よも四方	よろず

六音	数	1	2	3	4	一・五	6
	量概念	ひつ	ふつ	みつ	よつ	いつ	むつ
	意味	つひい	つふ	つみ	つよ	つい	つむ
	音イメージ	津つ陽ひ	粒	摘み	強い	終・初	つむ錘おもり
	徴税	戸	穀物	苧	人足		紡績
	計測	五戸	升	長さ	力		重さ

十音	数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
	時・処	つい、つい				何時か		なな	よよ	ここ	とおとお
		ついさつき				いつも		仏教	世・代	?	遠い
	日つけ	ついたち	ふつか	みっか	よっか	いつか	むいか	なのか	ようか	ここのか	とおか
月	新月	上弦	満月	下弦	新月						

新十音	数	1	2	3	4	5	6	7	八	9	10
	質概念				よつ				yはつ		
					強 つよ弓				つや光沢 兵つはもの		
	数える	ひとつ	ふたつ	みっつ	よっつ	いつつ	むっつ	ななつ	やっつ	ここのつ	とお
	物	いっこ	にこ	さんこ	よんこ	ごこ	ろっこ	ななこ	はちこ	きゅうこ	じゅっこ
者	ひとり	ふたり	三人	四人	五人	六人	七人	八人	九人	十人	

何事もいきなり大きくなるということはないから、最初に量の概念ができたときは「4」くらいからと考えるのは許されるだろう。まず「四音」の時期があった。そこでは空間の拡張がある序列として認識されたに違いない。その四音の語源を探るのは難しいが、ここでは人数の数え方に「ひとり」「ふたり」が入り込んでいること。「ミ」は「皆」という概念が強く、「三人」にその座を明け渡したと考えた。

さらなる語源であるが、「長さ」概念の根底には「時間概念」があることも考えて、3節までの考察から「潮と月」がらみの用語を当てた。すなわち「月太ツ」「月縊ツ」「潮干ツ」「潮満ツ」である。この末尾の「ツ」は私自身が意味を取れないので書き出しておいたが後の「六音」システムの形成とともに日本語の動詞イメージに固着したものと思う。実際の「オン」も違っていた可能性を否定できない。ここは、私自身の記憶にある「オン」を使っただけであくまで「概念」の復元であることをお断りしておく。

もちろん、この時代にも現代と同じく、「世」の次はなんだろうと気になる人もいて「よよ」や「オモーオロ」を基にし「yおもーyおろ」の音韻を使って「よもーよろ」を究極の量としてシンボル化していった人たちがいたと想像しても許されるだろう。

その次の拡張はいきなり十ではなく六で行われたように思う。なぜならここで「ツ」の音が組織的体系的に導入されているが、その上は「ななーよよーここ」のような畳音で構成されているからである。ではこの「ツ」音の組織的導入は何を意図していたのだろう。

それは畳音ではいけなかった理由から考えると考えていい。すなわち現在残っている「〜つ」だけでなく「つ〜」も重要な意味を持っていたと考えるべきである。この根拠になるのが前節で見えてきた漢字の逆接による概念語の形成法である。「ア音とオ音」による造語法

に限界が来た時、人々は二音の逆接語を用いて関連する概念を明示する方法をとったに違いない。それが漢字二音語に引き継がれたのであろう。つまり、漢字二音の逆接による造語法以前に音韻二音の逆接による造語法が存在した。それが仮説6。

#### 仮説6

具体的にはそれは租税システムと関連付けられるはずだ。なぜなら租税こそは支配者が人々の十全な理解を要請される部分だからだ。納得の上でも公正さの上でも。そのことは今も変わらない。

さらにここで月だけでなく太陽の重要性、つまり農耕民族の価値観が導入されたと考える。それは結局のところ、この謎を解くのに陰陽五行の影響を受け入れる、ということである。とすれば「つひ」は「津みずと太陽」となると同時に「対」を意味し夫婦、あるいは戸籍の単位となる。律令時代は五戸をもって一単位としていた。そして主な4つの租税と数量を組み合わせるためのネーミングが現在残っている「数」の語源となったのである。具体的には「穀物の量」「天然繊維による糸の量」「人足の量」「紡績による織物の量」の4つである。

その後で「なな」「よよ」「ここ」を加え最後を「とおとお」と定めたに違いあるまい。「とおとお」はその後「とお」になるが逆接語は「おと音」であろう。

現在の私たちは音に取り囲まれているのでピンとくるのに時間がかかるが、古代にあった近い音が「ネ」、遠くの音が「オト」だった。これも区分が必要になった時期の人々が漢風の「音オン」から派生させて区分を確立したのであろう。だから「音にきく美人」とは「評判の美人」という意味で必ずしも自分には面識がなくてもいい。自分がよく知っている美人についてしか「本音でいいますと、あまり美人じゃない」と言えない。その時の声音はもちろん小さいくぐもった声である。

蛇足だが「本音」を聞き出すためには膝をつき合わせて、時間をかけて話をする必要がある。つまり聴覚だけでは聞けないのが「ね音」。聴覚だよりでいいのが「おと音」。現在巷にあふれかえっているのは「おと音」。

そして五は一の再現となる。現在の私たちは一が始原だと思い込んでいる節があるが、漢和辞典をみるとわかるが、実は五が始まりなのである。イメージとしては五本の指があって手の機能が十全になる感じである。だから五はどちらかというと租税概念よりも時概念の語として定着したのであろう。両者の違いは「五いつ」には「あるまとまり」があるが「一いつ」には極小、つまり微量とのイメージがあることである。すなわち「初」とは瞬間のことである。その語感は今に至るまで「つい、つい」「ついさっき」といつか「いつも」などの時間概念に引き継がれている。

さらに当時の時間は一直線にすすむものではなく日が集まって月を形成し、月が集まって年を形成するというようにまさに現在言うところの階層概念の始まりであったのである。だから「終=初」となる。つまり演出家が「ついに明日は初日だ」といえばそのまま「今

日は練習の最終日だ」という意味になるのである。

終の棲家 一方「ついの棲み家」を広辞苑でひくと「最後にすむ家」とある。だが、一生同じ家でくらす「家の長男」などが自分の家をこういう風には呼ばないはずだ。むしろ語のイメージは「長い旅の終わりに、ここを最後の家に定める」という感じではないだろうか。つまり生家も同然とみなす、ということだと思ふ。だったら「初」という意味になる。ましてや仏教の輪廻思想が強い社会では「初＝終」だから、旅の終わりの意味を強める文綾にすぎず、語の意味はあくまで「初」ではないだろうか。

ついたち 事実、以下のペア文例をみれば「つい」には「知っている、予期している」という意味があることがわかる。一方、現代的な意味での「終わり」の特徴は「未知」である。

#### 例文8

- ・ついにマイホームがもてた。
- ・とうとうマイホームがもてた。
- ・やっとマイホームがもてた。(苦勞の積分量)

#### 例文9

- ・ついにばれた。(ざまあ見ろ！)
- ・とうとうばれた。(犯人の言)
- ・やっとばれた。(ばれるのを待っていた人のイライラの積分量)

ところが驚くべきことに広辞苑には「初」と「はじめて」の項目はあるが「はじめに」の項がない。しかし以下の例文をみれば二つを対にしてみても「初」と「始」の意味がはっきりするのである。一方だけでは意味をとれない。

#### 例文10

- ・初めて、あなたを診察します。(今まで診察したことはない)
- ・始めに、あなたを診察します。(第一番目にあなたを診察する)

ついたち

以上をまとめて「ついたち」は「月たち」の「イ音便」ではなく、「初日」の意味である。逆接の「いつ」は五行の五を意味し、対語である。このことは月の呼び方が新月、上弦、満月、下弦の4つしかないこととも整合する。長い間人々は月の上旬、下旬くらいの精度で暮らしてきたのだ。だから一と五に同じ「初」の意味を与えてきたこと問題にならなかったのである。

だが、月の三十日単位の生活をはっきりさせる必要がでてきた時に月の初日を「ついたち＝初日」と名づけ、月の終わりは「みそか」とか「おおみそか」と数字を冠した名にしたのである。

ようか

そしてその時期は中国由来の「八はつ」の音が直接輸入される時期よりかなり以前だと推定する。その理由については次の節で「八はつ」が新しい支配層にとって特別な意味

があったという考察とともに述べる。そうであれば「ようか」は「よよか」であって「やうか」の音韻交代ではない。

## 6、「質」概念と「八はつ」の導入

あらためて確認しておくが、ここで取り上げているのは主に現代で言う最先端の言葉、いわゆるテクノロジー語である。ここに取り上げられていない一般の人々の日常語は大野晋氏の本にあった「ア音」のバリエーションによる具象物の名と「イ音」等を使った現象や行為に関する語彙を主とする言語生活を念頭においている。

言葉の設計にあたっては現在のような識字層を当てにはできないから音韻イメージを重視していたはずである。あるいは逆に当時も現在のように膨大な新語があふれていたが、その中で必須のそして音韻イメージが明確な語彙だけが生き残ったと考えることもできる。

先にも書いたようにここへ語「マナ」を中核に多くの語彙と概念が入ってきては消えていったはずである。ここに書けたのは生き残った音韻だけである。

ただ、ここで津田氏の歴史イメージと異なるが、私は直接砂漠地方からいわゆる「マナ文明」が届いた、というよりは中国経由で中国語や中国音とともに入ってきたような気がする。それを検証するには中国語の音声に「マナ」関連の語彙があるかどうかを確かめればいい。確かめられなくても同時代といっても何千年単位のタイムスケールで二つの音韻体系とわれわれの祖先が接触したと考えることもできる。私はその方が可能性が高いと思っている。いずれにせよ、とにかく生き残った音韻がこれなのである。

さらにもう一つ、学校で習う「五十音図」について補足しておく。城生伯太郎氏が「オタミミ・ベンベの言語学」で論じているようにヤ行音を「ヤ、チ、ツ、ユ、ヨ」にして、タ行音を「タ、テ、ト」にする方が、このあたりのことを考える時にすっきり考えることができる。私自身はこの問題をかれこれ5年くらい考えているわけだが、ヒントになったのは「つや、露、つよ」が系列をなしているのではないかと着想したからである。

ここでは「チ」については触れていないが、ヨロズの下がチヂなのを考えると、チ音も系列に入れて、かなり意識的な語彙・音韻体系の設計・拡大があったと考えてもいいのではないかと。なんせ、量とか数の大小というのは当時の科学技術の最先端なのであるから、時の第一級の知性たちが精魂を傾けた長期にわたるプロジェクトだったはずである。

つまり、数がらみの語彙は意識的な語彙の拡大作業によっていたはずである。これを仮説7とする。

前節まで述べてきたように太古に「マナ」「アマ」「アラ」をとおして理念や究極という概念も伝来し、その民衆への普及もはじまったはずである。しかしここで大事なのは数が拡大しても、そんなに簡単には人々の具象の世界は拡大しないということである。現在の我々も「兆」の数字を新聞でよく見かけるが、1年単位で見えれば必要な量はせいぜい百万円までである。だから人々にとって「ヨ」とは憧れではあっても現実離れた数だった

はずである。考えうる限りの「最大・最長」だと言える。

その後一から十までの数システムが整えられてきたが、その間に起きたことは「質」の概念の確立だと考えられる。具体的には「人足」と「紡績」であるが、これは数だけでは価値をはかれない。強い人足と弱い人足がいるし、織物はただ目がつんでいて単位あたりの重さが同じなら同じ価値を持つかというところではない。織物ならば「つや」が「質」の指標として重要になってくる。

金属兵器と石器兵器の最大の違いも「光沢」にある。そこで新しく支配層になった人々は人足の強さと支配者の強さの違い、麻織物と絹織物の質、そして支配の象徴である金属の特徴を「つや」として語彙の中に定着しようと考えたに違いない。そして光量を基準にするならば権力の象徴は月ではなく太陽に変更せざるをえない。では具体的にどこに組み込むか、となれば8の意味をもつ「ヨヨ」と置き換えることで「質」の「量」への優越を確立しようとするしかない。

そのために人々が使っていた「よよ」を「八はつ」に置き換えた。だがまだ当時の人々は「は音」になじめず実際は「やつ」として普及した。その逆接語「つや」が現在に至るまで女性に圧倒的に支持される「はり・つやのある肌」である。

それがどのように強力な推進策をとまっていたのかを推しはかるには歴史ドラマを思い出せばいい。帝が御簾ごしにしか臣と対面しなかったことや大名行列の時に地面に這いつくばっている時代劇の農民の姿を思い浮かべてみよう。あるいは「ご威光」という言葉もある。すべて、主上は、あまりに輝かしく（神々しく）、直接見た者は目がつぶれる恐れがあるというメタファを演じていたのだ。太陽神アマテラスとはそのような輝きを放っていたに違いないというメタファを。

あるいは「つはもの」という言葉がある。これは律令制では「兵器や兵隊」を意味していた。だから公文書では「はつ・つは」が用いられたが、人々には無縁の概念であり続ける。「つ y はのある男」ではなく、「つよい男」がずっと日本人の憧れであり続けるのである。

だが現在の日本語の「つや」にはさらに全く、威光や威力の概念はともなわない。もっと古層から続く「ツヨ」が本来の意味で生き残り、せいぜい磨いた金属などの表面をあらわす言葉になってしまった。それには仏教の禁欲主義が預かっていると思うが、金属や鏡に対する嗜好の西洋との大きな違いを考えると、もっと身体の奥底にあるものである可能性も高い。

例をあげると戦後サラリーマンの必須アイテムだったカフス・ボタンは今や気障の証明になってしまったし、一世を風靡したピアスも下火になりつつある。江戸時代まで姿見は普段は覆われていて、使う時しか露出させなかった。これは西洋人が部屋の真ん中に鏡を置いて金力を誇示したのとは大きく違う。金属や光物に対するある距離感や遺伝子レベルの感すらある。

## 7最後に

ここでは「大きさ」「重さ」からはじめて「数」がらみの語彙分析をおこなった。この中ではふれなかったが、ここにいたるまでには日本の色・表象系の分析もかなりやりこんだ。たとえば「黒」。大野晋氏はアクセントを手がかりにその語源を考察しているが、私は「しろ」「くろ」はこのような対語として確立した時点で一旦「し」と「く」の対比が成立したのものとして考えた方がわかりやすいとおもう。当然「あか」「あお」も大事なものは「か」と「お」の対比になる。

その時代に一方のたとえば「あか」の別の意味の語が流通していたとしても、「お」との対比で関連のうすい語彙は淘汰されて消えていった可能性が大きい。反対に後世まったく関係ない語が、単に工芸品の意匠上の便宜性から「あか」の名にあやかって、文化的に流通していった可能性もある。だから色名だけでなく、「し・く」「か・お」、そして「あ・ろ」の音韻イメージに立ち返りながら考察をすすめることが大事になると考える。

ここで使った方法をマトリックス分析と名づけているが、何のことはない、音韻を使った「ジグソーパズル」を繰り返しているだけのことである。

ただしルールが一つだけある。デカルトの第三規則である。「自然のままでは互いに前後の順序がつかないものの中にさえ順序を想定してすすむこと。」

そうやって出来た絵柄が「まな—もの—おも」「つよ—つや」「つい—いつ」である。「理科と教育」について考え始めてから、あしかけ7年の歳月が流れて、エクセルのシートにして300枚以上の無駄絵柄が残った。公立図書館で借り出した本が500冊以上。

だが研究職時代も、そんなペースだったように思う。28年間の在籍で大きな成果は5つか、6つ。そんなものだろう。今回は雑用がなかったので集中して取り組むことができた。同年・同窓のオトコに研究を妨害され退職をよぎなくされたが、日本の職場はどこでも成果に対して給料が支払われるのではないのだから、仕方ない。なんだかわからないが我慢料、あるいは時間の拘束料が給料だと思ってきたが、正しい認識だったと、今でも思っている。

それでも今回の絵柄が何かの価値を持つとすれば会社員時代に雑用をやりながら得てきた「繰り返される身体経験」こそが、最大の功労者である。多くの方の御蔭ともいえる。

次は「し・く」の分析を始めるつもりである。「する・くる」の動詞分析にまでつなげられればとの思いからである。

国語教育への不満は言い出したらキリがないので、ここでは「数」に関する鈍感さへの批判にとどめたい。5節で述べたように「ついたち」は「月」と関連付けるよりも「初」と関連付けるほうが、周辺にある一つ一つの語彙関係がはるかにはっきりする。もちろん手始めに「月」と関連付けるのは当然だ。でも「初日」とも関連付ける手間を惜しんでほしくない。そうすれば「初」と「一」の関係に行き当たり、思想史上の時間概念も視野に入れざるをえなくなる。

このことは明治時代の国語学者が「五十音図」を導入した意図もむなしく、現在の国語学者は未だに「いろはうた」の世界で生きているということである。一つの仮説を考えだしたら、なぜそれをマトリックスの中で検討しないのだろうか。

それと「旧かな」に拘泥するのもよくないと思う。一例をあげるなら広辞苑の「雄雄しい」「多い・大きい」「おお、お見事」は「ヲ・ホ・ウ」に書き分けることになっているが、それは正書法の世界のことであって、民衆の話言葉では古代から三つともおなじ「オ」音だった可能性も高いと思う。だったら今現在の日本語話者の中に伝わる音韻を第一資料として音韻史を構築する方法があってもいいのではないだろうか。

さらに学校教育での辞書至上主義も考え直すべきである。

なんせ一部の理科教育関係者の圧力で国民の常識に反していても「度量衡」を「長さ、容積、質量」とすら書き換えるという事態がほとんどの辞書で同時におきていたのである。もちろん、辞書はあるがままの言語の記述だけを任務としているのではなく、民衆教化の重要な道具なのだから、その意味では辞書編者たちは現実的処理を行ったに過ぎない。しかし、そのことが、辞書を一部党派の自己満足の道具と墮させる危険を高めるのである。だから歴史的資料としての辞書には限界があることを肝に銘じるべきである。

私自身、学校時代辞書を引くのが嫌だった。だってわからない語は結局わからないし、わかっている語はひかなくてもわかるのだ。今回のように「本当のことは何か？」という疑問を持たない限り辞書は必要ないと思う。かえって劣等感を植え付けるだけだ。あるいは知識の注入しか出来ない教師の言い分を鵜呑みにする生徒しか育てられない。

現在友人と英語の本の読書会をやっているが、辞書にはお世話になっている。先生がいないのだから辞書をたよりに勉強するしかない。だが先生がいる学生時代は先生がきちんと辞書をわかりやすく説明してくれればいいのではないだろうか。辞書の後ろ盾がなければ生徒を納得させられない教師は不要だ。そうなった時、教師は辞書の優れた批判者となり、国語辞典は国民の知性を反映したものとなることができると思う。

私は素人ではあるが、日本国民でかつ日本語話者である。城生伯太郎氏が言うように国語改革が全国民によって担われるべきものであるならば、一石を投じることができれば幸いである。

以上 2006年2月

~~~~~

#### 筆者のプロフィール

出身；北海道生まれの東京育ち。小学校時代二年間をアメリカで過ごす。

専攻；有機化合物の単離精製と生物検定法

職歴；・化粧品素材および外反母趾対応ヒール靴に関する出願特許9件

・生活者・消費者の意識と行動調査レポート

・理科教育に関する言語・情報メディア研究レポート

現在； 地域の日本語ボランティア